
愛、死、てる。

立木ノエミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛、死、てる。

【Nコード】

N8096E

【作者名】

立木ノエミ

【あらすじ】

愛するが故に、自傷行為に走る夫…そんな夫に精神的に追い詰められた友人のためを思って言った一言から始まった最悪のシナリオ…。

衝撃

「マーコ。お願い、出て」

何十秒か呼び出し音が繰り返されると受話器からは留守番電話サイビスの無機質なアナウンスが流れてくる。

留守番電話にメッセージを吹き込む。切る。また電話を掛ける。呼び出し音、そして再び流れる無機質な声……もう何度、メッセージを吹き込んだろう。

そうこうしている内にタクシーは白く真新しいマンションの前に止まった。慌ててお金を払う。

「お釣りは結構です」

タクシーを飛び出した私はマンションの入り口でマーコの部屋番号を押し、チャイムを鳴らした。

「マーコ？ 私、リカよ。いるなら開けて」

オートロックが外された。

よかった。マーコは無事だ。

私は十二階のマーコの部屋へと向かった。

「マーコっ」

何度かドアを叩く。返事がない。ドアノブに手を掛けると何の抵抗もなくドアが開く。

「マーコ。いるのっ」

入り口で声を張り上げる。部屋の中は真っ暗だ。私は恐る恐る部屋へ足を踏み入れる。

「……マーコ？」

廊下の先に位置するリビングでユラリと人影が揺れるのが見えた。私は手探りでリビングの電気のスイッチを入れた。

「ヒッ」

リビングが光に照らされた瞬間、私は両手でキックキック口元を

押さえた。

悲鳴や嗚咽や、吐き気、あるいは発狂……その他もろもろを押さえ込もうとするように……。

二人掛けのソファの上には、変わり果てた友人の姿があった。

そう、ちょうど一週間前、彼女の夫が死んでいたのと同じソファの上に……。

不穩

「あっちゃあ、もうこんな時間になっちゃった」

マイクを片手に時計を見ながらマーコが言った。時間はすでに十二時を回っていた。私達は慌ててカラオケボックスを出た。

「ごめんね。新婚さんなのにつき合わせちゃって。旦那さま、怒ってない？」

マーコはつい三ヶ月程前に結婚したばかりだった。玉の輿というほどでもないが新郎の父は一流企業の部長で、新郎も同じ会社で働いている。

嫁の立場というのはなかなか気苦労が多いのか、久しぶりに会ったマーコのはしゃぎっぷりは尋常ではなかった。暑気払いということでビアホールでジョッキを重ね、行きつけのバーへ行き、まだ物足りないというのでカラオケへ行ったのだった。

「アハハハ、そうだね。引ったくりにでも遭って、警察に被害届け出しに言ってたとも言っわ」

「何よ、その無理やりな言い訳」

アハハハハとつられて私が笑っているとマーコはガードレースに足を掛けた。

華奢なヒールのサンダルはバランスを崩し、「あっ」と声を上げる間もなくマーコは道路へ激しく転倒した。

「ちょ、ちよつとマーコ。何やってんのよ!」

マーコの膝は擦りむけ、受身を取るような姿勢で転んだため肘の辺りからは血が薄手のブラウス越しに滲んでいた。

「アハハハ、大丈夫。飲んでるからね。あんまり痛さは感じない」
そう笑いながらマーコは、カバンを持ったまま引きずられたとしたらもつとこの辺も汚れてるわよねと自ら洋服をアスファルトに擦りつけた。

私はマーコのその行動に薄気味悪さすら感じながら言った。

「ねえ、マーコお。旦那さんに怒られそうなら、私が無理やり引きとめたって説明するから。ね、何ならマーコん家まで一緒に行ったげてもいいし」

「ダメダメ、そんな事したらリカの身が危なくなっちゃうから」
「え」

マーコの言葉に不穏な響きを感じ、聞き返そうとした時にはすでにマーコはタクシーを捕まえていた。

「じゃあねえ」。絶対にまた遊びに行こうね」

タクシーが動いてもマーコは座席後ろのガラス越しにいつまでも手を振っていた。

釈然としない思いを抱きながら、私は小さくマーコに手を振り返した。

自傷

マーコと再び会ったのは飲みに行ってから、一ヶ月ほど経った日のことだった。

「お待たせ。もう注文した？　じゃあ、私も日替わりで」

マーコからお昼でも食べないかと連絡をもらった時から嫌な予感がしていた。

仕事があるから平日の昼間はゆつくり出来ないし、大体お酒が好きなマーコからランチのお誘いなんてあり得なかった。

「ごめんね。忙しいのに」

「うん。でも今日フレックス使ったから。二時まで大丈夫よ」

私はあえてカラリとした笑顔を作った。しかし辛うじて笑みを返すマーコの顔色は暗く冴えなかった。

その弱々しい笑顔を見て私は思い切って尋ねてみた。

「ねえ、旦那さんと上手く行ってるの？」

マーコは顔を引き攣らせ、ビクリと身体を震わせた。

やはり……私は単刀直入に聞いた。

「旦那さんに暴力でも奮われてるんじゃないの？」

「ううん、違う。それは違う」

マーコは顔を上げ即座に否定した。

暴力ではない。だったら一体……しかしマーコはそのまま俯いて口を噤んでしまった。

「ねえ、直接的な暴力はないにしても、何らかの形で傷つけられてるんじゃないの」

「う、ん」

「教えてよ。一体何があつたの」

「どうせ……信じてもらえないよ。親でさえ信じてくれないんだもん」

マーコはそう言うつと溜息をついた。

「信じるか信じないか……話してもらわないことには判断できないじゃない」

私もそう言って溜息をついた。

しばらくの間気まずい沈黙が流れ、マーコはやつと重い口を開いた。

「この間、飲みに行った時、遅くなっちゃったじゃない」

「あの後、怒られた？」

「ううん。怒られはしなかった。それどころか私の怪我の心配をして手当てしてくれた。そしてお茶でも煎れるよって言ってキッチンへ行ってお湯を沸かしてくれたの」

「よかったじゃない」

そこまで言うとマーコは一旦言葉を切り、沈痛な面持ちで視線をテーブルに落とし、そして再び口を開いた。

「しばらくしてキッチンから騒がしい物音がしたの」

「物音？」

「慌ててキッチンへ入ったら、床に彼とヤカンが転がってて」

マーコは顔を上げた。

「彼、熱湯を浴びたのよ」

「え……」

マーコの言葉が意味するところが分からずに私はポカンとした。

「私が怪我したのと同じ右足と右腕に」

「ちょ、ちよつと待って。一体どういう事っ」

マーコは苛立ったように眉間に皺を寄せて言った。

「『ボクがついていながら君に怪我をさせてしまったから、ボクは自分に罰を与えたんだ』っていうのよ。それだけじゃない。私が毎日家にいてもヒマだからパートにでも出ようかって相談すれば『いいんじゃない』って言いながら熱した油に手を突っ込むし、実家に泊まりに行くって言ったら割れたガラスの上を素足で歩くし……リストカットなんて日常茶飯事なのよ」

マーコは一気に捲くし立てると「フウ」と大きな溜息をついて頭

を抱え込んだ。

マーコの口から飛び出る信じがたい事実には私は言葉を失った。

「今朝だって、マーコとお昼を食べに行くって言ったら、笑顔で『いつてらっしゃい』っていいながら、次の瞬間ガラステーブルに頭を打ちつけて……額がパクツて割れて、血がタラーって……どう、笑えるでしょう」

マーコは半ば自棄になったように無理やり笑みを浮かべてそう言った。

「どうって言われても……」

私は混乱した頭を抱えながらも、何か言葉を掛けなければ……そんな義務感にも似た思いで口を開いた。

「それおかしいよ。どう考えても彼は普通じゃない。離婚した方がいいよ」

「私だってそうしたいわよ。でもそんな事口にしたら彼一体何しでかすか……」

「マーコの親御さんに相談するとか」

「とつくの昔にしたわよ。でも信じてくれないのよ。そりやそうよ。彼、誰に対しても人当たりがいいんだもの。あんなにいい旦那さんなのにどうして離婚なんて考えるんだって。ヤケドだって、ヤカンを持った手を滑らせてって言えば誰でもその言葉を信用するわよ。自分で自分を笑いながら傷つける人間がいるなんて、誰も誰も信じないわよ」

マーコは髪を掻き毟るように両手で頭を抱えながら首を激しく振った。

「マーコ、しっかりしてよ」

「もう、どうにかなりそうよ。毎日毎日、目の前で私のせいで人が傷つく様を目の当たりにしてるのよ。彼は自分自身を罰してるっていうけれど、そうじゃない。私を罰してるのよ。私を罪の意識で追い詰めようとしているのよ」

「マーコ……」

マーコの目尻に涙が滲んでいた。

私はマーコの肩に手を乗せた。

ふと肩に乗せられた私の手につけられた時計をマーコは見た。

「大変……早く帰らないと、今度は何をされるか」

マーコの顔に恐怖の色が広がった。

カバンを持ち立ち上がろうとするマーコの両肩に私は手を置いて無理やり座らせた。

「リカ……」

「マーコ、やっぱり旦那さんと別れなきゃ」

このまま帰してはいけない。このままではマーコの精神が崩壊する。そう思った私はマーコに言った。

「旦那さんに離婚したいってハッキリ言わなきゃ」

「でもそんな事言ったら、彼、自殺しかねない……」

「自殺なんてしない」

私はそう確信していた。

自分に罰を与えているのではなく、彼女に罪の意識を抱かせるためにやっているのなら、彼女を繋ぎとめようとしてやっているのなら……彼は自殺なんてしないはずだ。

「直接言えないなら手紙にでも書いて……とにかく彼から離れなきゃ。マーコがおかしくなっちゃう」

マーコは私の目を見つめた。まるで私の目の中に答えを探そうとでもするかのように……。

そうしてしばらく私の目の奥を探っていたが、やがてマーコは弾かれたようにカバンと伝票を掴むと逃げるようにその場を立ち去って行った。

大急ぎで走って行くマーコの姿が曇りガラス越しに歪んで見えた。

事件

マーコから相談を受けたその日の夜遅く、突然電話が鳴った。

「リカッ。お願い来てっ。彼が、彼がああああ」

ブチッ……ツーツーッ。

私はパジャマの上から上着を羽織ると表へ出て急いでマーコの家へ向かった。

まさか……まさか……頭の中で嫌でも想像してしまう最悪の事態が浮かんた。その度にそんなはずはないと打ち消す。

そんなはずはない。そんなことがあつてはならない。そんなことにはならないで……その思いはマーコの家へ着く頃には切望に変わっていた。

この春建てられたばかりの新築のマンション。染み一つないエントランスをくぐり、エレベーターに乗り込む。

「マーコ……ねえ、マーコ」

インターホンを押すのもどこかしく、ドア越しにマーコの名前を呼ぶ。

数回呼んで、やっとドアが開かれた。

「マーコっ、よかった無事なのね」

とりあえずマーコの無事を確認できてホッとする。しかしマーコはそれに対して返事もせずに、フラリとリビングの方へ向かう。

「マーコ……」

マーコの後をついてゆく。リビングの入り口で立ち止まるマーコ。マーコの肩越しに中の様子を見る。

身体中から、血の気が引いた。

リビングの中央にある二人掛けのソファの上には血まみれになったマーコの夫の姿があった。その胸元には包丁が突き刺さっている。

私は視線をマーコに向けた。マーコは身動きせずに関わり果てた夫の姿を凝視している。よく見ると返り血を浴びたのかマーコの洋服にも血が飛び散っていた。

「まさか……」

そう呟いた途端、マーコは私の方へ振り向いた。

「私じゃない、信じてリカ。私じゃない」

マーコは私の両腕を掴んだ。その瞳は真っ直ぐに私を見つめていた。

「また彼が手首を切ろうとしたの。もう私ウンザリして、それで言っちゃったの。もう限界だ、別れたいって。そうしたら彼、包丁を持ち出して、私に殺せって言ったのよ。嫌だって言ったら『殺さないなら、ボクが君を殺す』って言って、私に無理やり包丁を握らせて……そうやって揉み合っている内に彼が、包丁の方に倒れこんできて……」

ワアアアと号泣するマーコを私は抱きかかえた。

「分かってる。マーコ、分かってる」

私の責任だ……私はマーコの背中を擦りながら、苦い思いを噛みしめた。

証言

簡素な造りのテーブルとパイプ椅子だけの殺風景な部屋で私は一人、座っていた。

目の前に出されたお茶はもうすっかり温くなってしまっているだろう……どちらにせよ、こんなところで出されたお茶など飲む気がしない。

別室ではマーコが事情聴取を受けているはずだった。それが終わってから私への尋問が始まる。

マーコ、大丈夫だろうか……。

カチャ。

ドアが開く音に弾けるように私は顔を上げた。五十歳くらいの恰幅のいいスーツを着た刑事と思しき男と、私と変らないくらいの制服を着た警官が続いて取調室に入ってくる。

「えっとあなたが、河野里香さん」

「あの、マーコ、いえ竹内舞子様子は」

年配の刑事は私を瞬間チラリと値踏みするような視線で見定めると、すぐにとつてつけたような笑みを浮かべて言った。

「ええ、あんな目に合われた割りには落ち着いている方です。それよりあなたはどうして現場にいられたんですか」

私はその年配の刑事に全ての事情を説明した。

マーコが夜遅く帰ってくると夫が自分の身体に熱湯をかけたこと。友人とランチに出かけようとする Glasstea ぶるに頭を突っ込んで自ら怪我を負ったこと……。

彼女を束縛するために彼が当てつけのように自傷行為に走っていた事実を余すことなく語った。

「ですからマーコの夫が死んでしまったのは私の責任なんです。私が余計な事を言ってしまったから……私が、私がマーコの夫を殺したようなものです」

私は涙ながらに訴えた。しかし年配の刑事は表情ひとつ変えず、むしろ面倒臭そうに言った。

「仮にあなたの一言で相手が死んだとしても、それはあなたのせいではありませんよ。被害者は舞子さんが持っていた包丁で死んだわけですから。問題は舞子さんに夫を殺す意思があったかどうか……」
「だから言ってるじゃないですか。あれは事故です。そうでなければ正当防衛です。だってマーコの夫は自分を殺さなきゃマーコを殺すって言ったんですよ」

「それをあなたが実際に聞いたわけじゃないでしょう」
私は開きかけた口を閉じた。

これ以上言っても無駄だ。疑うことが彼らの仕事なのだから。
「現場検証と検視結果が出てみないことには何も言えません。今日はもう帰っていただいて結構ですよ」

私は席を立った。そうして部屋を出る間際、立ち止まって刑事の方を振り向いた。

「最後に一つだけ言うておきますが……被害者の身体から不審な怪我や痣が発見されたとしても、先ほと言いましたように被害者自身による自傷行為ですから」

「考慮します」

私の証言に果たしてどれだけの信憑性があつたのか分からないが、とりあえず私は自分が言えることだけは言っておいた。

何とかマーコに対する容疑が少しでも晴れてくれれば……そう思いながら取調室のドアを閉めた。

その時だった。

「どうしてえ、どうしてなのよおおおお。なぜあの子があんな目に遭わなきゃならないのよおおおおおお」

激しい慟哭が聞こえた。

廊下の向こう側から和服を着た女性が夫と思しき男性に抱えられるようにして歩いてくる。

「何で、何でなのあなたあ。あんなにいい子だったのに。どうして

こんな事にいいいい」

マーコの夫の母親だろうか。仕立ての良い着物は着崩れ、結い上げられた髪からは何筋もの後れ毛が落ちている。

彼女は息子を失った悲しみから身も世もなく泣き叫びながらこっちへ向かってきた。

すれ違いさまに彼女の夫が軽く会釈する。

まともに相手の顔を見ることが出来ずに俯いたまま私も頭を下げる。

母親がふと泣き止んだ。

視線を感じる。

私は足早にその場を立ち去った。

葬儀

あの母親の慟哭が頭から離れなかった。

事件から一週間後、マーコの夫の葬儀が行われた。

激しい罪の意識に苛まれた私はせめてお焼香だけでもと、会社を抜け出して葬儀に足を運んだ。

それに……マーコの事も心配だった。

事件以後、マーコと連絡が取れなくなっていた。

事件後すぐマーコは携帯を解約されていた。マンションへも行ってみたが現場検証中で立ち入り出来る状態ではなかった。彼女の実家へも電話を掛けたが戻ってはならず、逆にマーコの居場所を尋ねられたほどだった。

葬儀にいけばマーコに会えるだろう……私の事を恨んでいるのかも知れないが、とにかく一度会って話がしたかった。

受付で名前を記入し、香典を手渡した。

何十人も参列者の群れに改めて自分の罪を思い知らされる。

私は頂垂れながら焼香の列へ並んだ。

身内の人々が沈痛な表情で一人一人に頭を下げながら、参列者のお悔やみ言葉に耳を傾けている。

あの母親はその中心で固く固く手を握り締め、一点を見つめていた。

口を一文字に結んで、瞬き一つせずに佇んでいる。

その姿は痛々しく、慰めの言葉を掛けるのも躊躇われるほどだった。

身内の人々の中にマーコの姿はなかった。私はお悔やみの言葉を

述べた後、マーコの事を尋ねた。

「あの、舞子さんは……私、彼女の友人の河野と申します。彼女は葬儀には……」

そう言いかけたところで親戚の一人が「ちょっとこちらへ」と言いながら私の腕を取った。

「あの、お焼香だけでも」

私は他の身内の顔色を伺いながらそう言った。皆、眉間に皺を寄せながら私から目を逸らした。

その中でただ一人、母親が私の方を向いた。

先ほどまで魂を奪われたかのように一点を見つめ続けていた母親。その彼女の瞳は大きく見開かれ、私を凝視した。

「あのバカ嫁の友達だとおおお」

母親はそう低く唸ったかと思うと突然私に掴みかかってきた。反射的に後ずさる。

周囲の人が抑えるように背後から彼女を抱え込む。

「スミマセン。マーコの事をそんな風に言わないでください。私が悪いんです。私が余計な事を言ったから」

私は必死になって謝罪の言葉を述べた。

母親は嗚咽とも悲鳴ともつかない声で「離せ、離せ」と抵抗している。

私の腕を掴んでいた親戚の男は半ば強引に私を母親から引き離した。

「許さない。あのバカ嫁。許すもんかあああああ」

愛する息子を亡くした、母親の雄叫びは斎場の外まで響いていた。

不安

追い払われるようにして斎場を出た私は、その場で静かに手を合
わせた。

そしてその場を立ち去ろうと顔を上げると、そこにマーコの姿が
あった。

「マーコ、大丈夫」

「うん。元々お義母さん、私の事好きじゃなかったしね。もし私が
あの場にいたらそれこそ收拾つかなくなっちゃうから」

少し離れたところにある喫茶店でアイスコーヒーを飲みながら、
マーコは落ち着いた口調でそう言った。

思ったより元気そうだ。私は少し安心した。

「ごめんね、マーコ。私のせいで」

謝る私にマーコはとんでもないと言った風に手を振った。

「リカのせいじゃないよ。遅かれ早かれ、ああなる運命だったのよ。
不幸な出来事だったけど、結果として私は解放されたんだもん」

マーコはどこか吹っ切れたようで、その表情には解放された喜び
すら感じられた。

夫の葬儀の日に不謹慎なのかも知れないが、それほどにまでマー
コは追い詰められていたということなのだ。

マーコが私を恨んでいるから連絡がないのかと思った……それを
聞くとマーコは笑った。

「だって携帯はつながらないし、連絡もないし……」

「ああ、それね……」

マーコの表情が僅かに翳った。

私は見逃さなかった。ごまかすように笑みを浮かべるマーコに、
目で「何？」と詰問した。

「ちよっとね、嫌がらせていうか」

「嫌がらせって……お義理さん？」

「まあ、仕方ないんだけどね。それでちょっと姿をくらましてたの。どっちにしてもマンシヨンは現場検証で戻れなかったし」

「私にくらい教えてくれたって」

「だって、万が一リカに被害が及ぶような事があつたらさ……」

そう呟くとマーコは表情を更に曇らせた。私はマーコの腕を掴み擦りながら言った。

「大丈夫だって」

「うん」

浮かない顔色ではあつたが、それでもマーコは笑顔を見せた。

「まあ携帯も変えたし、新しい引越し先も決まったから、さすがにそこまではお義理さんも追ってほこないか」

「新しい住所決まったの」

「うん。今夜早速荷造りして、明日の朝一番に引越し屋さんに来てもらう予定なの」

あ、そろそろ行かなきゃ。マーコが時計を見て言った。

「ごめんね、バタバタしてて。引越して落ち着いたら必ず連絡する。後、これ。色々心配かけたから」

マーコはカバンから封筒を取り出して私の前に置いた。

「何よ、これ。いいよお礼なんて」

「いいから、気持ちだけだから。じゃあ私、行くね」

そう言つて立ち上がったマーコは新しい生活に対する希望に満ち溢れていた。

「必ず連絡ちょうだいよ」

レジに向かうマーコの後ろ姿に向かって叫んだ。マーコは晴れやかな笑顔で手を振った。

弾むようなマーコの後姿を見送った私はテーブルに残された封筒を手に取った。

私は目を見開いた。

中には札束が入っていた。ざっと見て百万円は入っていそうだった。

舌

「一体どういいうつもりであんな大金……」

会社へ戻ったものの、仕事をしている間中あのお金のことが気になって仕方がなかった。

仕事が終わリ次第マーコへ連絡を取ろうと思い、やっと電話が出来たのは夜の八時をすぎた頃だった。帰る道すがら何度か電話を掛けてみた。

しかしマーコは電話に出ない。

「引越しの準備に夢中で気がつかないかな」

そう思いながら携帯を片手に自分の部屋がある階でエレベーターを降りた。

マーコの番号を発信し、電話を耳にあてたまま廊下を歩く。

「やっぱり出ないか」

電話を切って、顔を上げた。

「ヒッ……」

携帯が手から滑り落ちた。

ドアに赤い塗料で殴り書きがされていた。

「ヒ、ト、ゴ、ロ、シ……」

人殺し……。

私はその文字から目を離せないままに、電話を拾おうと膝を曲げた。

「ヒッ」

電話を探っていた手に何やらヌルっとしたものが触れた。

「何……これ」

落ちた携帯電話の脇に何やら赤い色をした塊が落ちていた。何だろつと身体を屈ませてその塊に顔を近づける。

「……ッ、……キヤア、嫌だあつ」

屈ませていた上体が恐怖で後ろに仰け反った反動で尻餅をつく。何とか離れようとものがくものの、腰が抜けて後ずさることも出来ない。

その赤い塊は……舌だった。

それも人間の……。

でも、一体誰の……。

「ハッ」

嫌な予感がした。私は恐る恐る携帯電話に手を伸ばした。マークへ電話を掛ける。

つながらない。

今度はマンションの方へ掛けてみた。数回コールした後、電話は留守番電話に切り替わった。

「マークっ。マークいるのっ。お願い、返事してっ」

何度も呼びかけるが、録音時間が終了して電話が切れる。

私は駆け出した。

惨劇

まさかあの舌は……。

恐ろしい想像を払いのけるように私はマーコの住んでいるマンションのインターホンを鳴らした。

「マーコ？ 私、リカよ。いるなら開けて」

オートロックが外された。私は十二階のマーコの部屋へと向かった。

「マーコっ」

何度かドアを叩く。

返事がない。

ドアノブに手を掛けると何の抵抗もなくドアが開いた。

「マーコ。いるのっ」

入り口で声を張り上げる。

部屋の中は真っ暗だった。

私は恐る恐る部屋へ足を踏み入れた。

「……マーコ？」

廊下の先に位置するリビングでユラリと人影が揺れるのが見えた。

私は手探りでリビングの電気のスイッチを入れた。

「ヒッ」

リビングが光に照らされた瞬間、私は両手でキツくキツく口元を押さえた。

二人掛けのソファの上に、首を仰け反らせ大きく口を開けた見知らぬ女の死体があった。

いや、あれはマーコだ。

その口は左右に大きく切り裂かれ、瞳は恐怖に大きく見開かれて

いる。

そしてその口の中にあるはずのものは……ない。

「ウウプッ」

キツく押さえていた手の間から嘔吐物が漏れ出た。

その時、目の端でユラリと人影が揺れるのを捕らえた。

「あらあ、吐きそうなの」

ユラリと揺れるようにマーコの死んだ夫の母親が立っていた。

着崩れた喪服とすっかりほどけた髪が激しく揉み合った後であることを物語っている。

手には剪定ばさみを持っている。

刃の部分が赤く染まっていた。

まさか、あのはさみで……。

「ウゲッ」

そう思った途端、再び吐き気が襲ってきた。

「あらあら、いけませんよ。せっかくあの子が買ったマンションを汚すなんてこと許しませんよ」

返り血を浴びた顔に神経質そうな笑みが浮かぶ。

「吐くならソコに吐きなさい」

ユラリと母親は私に近づきながら、視線をマーコの方へと向けた。私は激しく首を振った。次の瞬間、頭に熱いような痛みを感じた。

「吐けって言ってるだろっ。あのバカ嫁の口の中に吐いちまえっ。吐かないとアンタの舌も切ってしまうよっ」

母親は思いつきり私の髪の毛を引っ張りながら、目の前で剪定ばさみをちらつかせた。

吐き気と恐怖で涙が流れた。

「ほら、こうなりたいのかい」

母親が私の頭をマーコの前に突き出した。

鋭利な刃物で切られた舌の根元からは血がジクジクと噴出している。

あまりのおぞましさに胃がヒクつく。

胃の中のことを恐怖と一緒に吐き出してしまいたい……。

でも嫌だ。マーコの口の中になんて。

友達を、死者を冒瀆するような真似は絶対に、絶対に嫌だっ。

「往生際の悪い娘だねっ。そんなに舌を引っこ抜かれないかいっ」
母親が剪定ばさみを振り上げた。
もうダメだっ……私はキツく目を閉じた。

「待てっ」

野太い男の声に母親は扉の方を向いた。

その瞬間、髪の毛を掴む手から力が抜けた。

私は彼女の手から逃れ、絨毯の上に思いつきり嘔吐した。

数人の警官に母親が取り押さえられるのが横目にボンヤリと見える。

「無事か」

目の前にハンカチを差し出される。

顔を上げるとそこには取り調べをしたあの刑事の姿があった。

真相

「怪我はないようだな」

取調室で刑事はいつになく労わるような調子でそう言った。

目の前にはお茶が出されている。以前と変わらず不味そうだったが私はゴクゴクと飲んだ。

胃液で喉が荒れていた。

「どうして、マーコのマンションへ来たんですか」

刑事は一枚の紙を私の前に差し出した。

「逮捕状……」

それはマーコに対する殺人容疑の逮捕状だった。

どうして……と聞くまでもなく刑事は説明を始めた。

「彼女の夫には多額の保険金が掛けられていた」

私は顔を上げた。刑事は私に同情するような目で見つめながら続けた。

「彼女の夫の遺体に傷跡などなかった。ヤケドの痕も……きれいなもんだった」

「暴力を受けていたのは、マーコの方だったんですね」

刑事は軽く目を見開いて私を見た。私は机の上を見つめながら言った。

「葬儀があつた日、マーコからお金を受け取ったんです。百万円ありました。お礼にしては幾らなんでも大金すぎる。それで今までのマーコの言動を思い起こしてみたんです。

初めて相談を受けた日、確かマーコ『遅くなったら何されるか』って口走ったんです。夫が自傷行為に走ることを心配するなら『何しですか』ですよ……それにマーコ、夏だというのに長袖のブラウスを着ていました」

私は口早に一気に話すと、何とか自分を落ち着かせようとフウーと溜息をついた。

「結局、私、利用されてたんですね」

そう口にすると涙で声が震えた。

ついさっき自分を襲った恐怖やら悲しみやらで心が散り散りだった。

ただ、マーコに対する怒りは不思議と感じてはいなかった。

「近所で聞き込みを行ったところ、姑が毎日のようにマンションに出入りしていたらしい。

暴力を奮う夫とヒステリックな姑。

しかし夫の父と彼女の父が仕事上のつき合いもあって、実家へ逃げること出来なかった。

……竹内舞子は相当に追い詰められていたんだ」

刑事の言葉を聞いている間中、私は目と唇を固く固く閉じ、歯を食いしばった。

そうでもしなければ溢れ出る感情を抑え切れなかった。

そうしているとマーコの顔が浮かんだ。

それはあの舌を抜かれた断末魔の叫びが聞こえてくるような死に顔ではなくて、

新たな生活に希望を抱いて喫茶店を去った、あの笑顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8096e/>

愛、死、てる。

2010年10月8日15時50分発行